

わたしの評価方法 ～身近な地域の歴史調査～

神奈川県 公立中学校教諭

1 はじめに

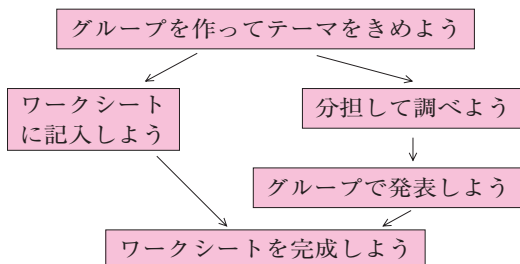
目標に準拠した評価（絶対評価）が実施されて2年目に入り、いくつか具体的な実践レベルでの課題が見えてきている。たとえば、単元ごとなり授業ごとなりの評価を、どう学期の総合評定に結びつけていくかという課題である。数値化したりポイント化したりする方法がよく用いられていると思う。しかし、それも「何を何点にするのか」「4観点の比重が均等に近くなるようにするためにはどうすればよいか」など難しい点も多い。また、「関心・意欲・態度」はどう測るか、「思考・判断」を高めるためにはどういう支援が必要か、とくに学習状況をCと評価した生徒がBに到達できるように、具体的にどう支援すればよいかといったことも大きな課題である。

その他様々な課題はあるが、わたしが職場でいつも言うことは「絶対評価の悩み方が相対評価の悩みより全然本質的だよ」ということである。

今回与えられた課題は、「身近な地域の歴史調査」という単元で、「関心・意欲」「思考・判断」をどう測定し評価するかという難問である。

2 単元の評価計画

- (1) 単元名「わたしたちのくらす地域の歴史を調べよう」
- (2) 単元の流れ



(3) 評価の手立て

- ・ワークシートにより評価する
- ・ワークシートにはあらかじめ次の評価規準を明記しておく

(4) 評価規準

【関心・意欲・態度】（ワークシートの☆部分）

- A 規準** 身近な地域の歴史について具体的に興味をもって調査し、さらに調べようとか、もっと深く調べたいとか、他の地域ではどうか、などと発展的に学習に参加でき、そのことがワークシートに表現できた。
- B 規準** 身近な地域の歴史について具体的な興味をもって調査に参加し、そのことがワークシートに表現できた。

【思考・判断】（ワークシートの★部分）

- A 規準** 調べる前の自分の予想との違いを見つけたりあらたな疑問点を複数指摘できたりし、かつ、地域の特徴を自分なりにとらえることができた。
- B 規準** 調べる前の自分の予想との違いを見つけられた。または新しい疑問を見つけられ、地域の特徴をつかもうと考えられた。

(5) ワークシート例（次ページ）

3 評価の実際

(1) 点数化する部分、しない部分

子どもたちの学びについて、あらゆる機会を捉えて評価することはもちろんだが、すべてを評価できるわけではないということもまた自明である。さらに、すべてを点数化できるわけでもなく、とくに情意的な観点である「関心・意欲・態度」をどう総合評定にいかしていくかというところは、現場の教師が皆戸惑っているところである。

今回の提案では、評価の対象を、ワークシートの☆の部分（関心・意欲・態度）★の部分（思考・判断）に限定した。単元のねらいと乖離しないように評価の対象を限定することが大切である。

(2) 評価規準はあらかじめ示す

評価規準をあらかじめ示すことによって、生徒は目標がはっきりつかめるようになる。

今回の場合でいうと、生徒は「とにかく興味をもったことを具体的にワークシートに書くんだな」

「わたしたちのくらす地域の歴史を調べよう」

年 組 番 氏名

評価規準 【関心・意欲・態度】☆の欄 A規準・・興味をもったことを具体的に示し、もっと調べたいことも記入している。 B規準・・興味をもって調査に参加して、その様子を記入している。	A規準・・事前の予想と比較して書けている。また、複数のあらたな疑問を見つけている。 地域の特徴をつかんでいる。 B規準・・事前の予想と比較して書けている。また、あらたな疑問を見つけている。 地域の特徴をつかもうとしている。
グループテーマ	
☆個人の目標（知りたいこと・楽しみにしていること）	
仕事の分担と調査計画	★まとめ=わたしたちの地域とはどんな地域か？
★調べる前の予想と違ったこと	
★あらたな疑問	
グループで調査したことについての感想	
他の班の発表を見て	
★まとめ=わたしたちの地域とはどんな地域か？	
☆学習全体をふりかえって・・・もっと調べたいこと	

「疑問を追究したり、予想との違いを見つけたりするんだな」と思って学習していくようになる。

(3) グループで行う場合も個人レポートを課す

グループで学習する場合の評価というについても、わたしは個人レポート(今回はワークシート)を必ず提出させている。

今回の案では、評価の対象とする場面はワークシートに表現される部分に限定しているので、グループ活動については「感想」という欄への記入のみとなっている(これは点数化しない)。しかし感想を増し刷りすることなどにより、相互評価の威力を十分利用できると思う。

(4) 自己評価

ワークシートを作成するにあたって、あらかじめ評価規準を明記し、学習の過程が追えるように心がけ、最後にふり返りをさせる。できれば相互評価の場面も取り入れる。(今回の場合、グループで調査したことについての感想、他の班の発表を見て、がそれにあたる)

生徒がシートに記入し、教師の評価を得て、もう1度シート全体を見通せば、自己教育力が高まると思われる。

(5) 教師の支援

教師は評価規準にそって支援することが大切である。わたしたちは「じっと静観して」生徒の実

力を測定することが評価だと思い違いをしがちである。教育評価は、生徒の学びと教師の支援、生徒同士の学び合いなどを通じて、螺旋型に高まっていくものである。

(6) 具体的な事例

ワークシートに記入された具体的な事例と私の評価を示してみよう。

①自分の住んでいる家のそばに、こんなにたくさんお地藏さんがあるなんて、この勉強をするまで気づかなかった。→ <評価B>

②昔の地図をいくつか比べてみました。事前の予想と違って、住宅地の広がり「大正の終わり頃」、「第二次世界大戦の終わった後」、「昭和40年頃」と3回大きな変化があったことがわかりました。これから何年後にこういう変化がおこるのかとても気になります。→ <評価A>

③○○商店街の歴史を調べたら、もとあった商店街が戦争で焼けてしまい、戦後になって今の場所に移ってきたことがわかりました。また、商店街の様子もだんだん変わり、現在はお肉屋さんや八百屋さん魚屋さんなどが減ってきているそうです。それは、スーパーが増えたからだそうです。わたしたちの町の商店街からでも、いろいろなことが発見できました。今度は△△商店街についても調べてみたいと思います。→ <評価A>

4 おわりに

現行の教育課程では、「教科書にない」学習が3年間のうち多くの時間を占めている。評価で言えば、「教科書の内容を理解しているか」ということで測定することが、もともと不可能な単元が非常に多いということである。それらの単元でこそ、わたしたち教師が知恵を絞り、子どもたちの学びを豊かにしていくことが大切である。

さらに、教科書の内容もこれまでとは違い、帝国書院の歴史的分野の教科書でいえば「歴史探偵」や「授業のあとでやってみよう」などが重要な位置を占めているし、本文の叙述も社会史を中心にしたものになっている。

こういう学びの中で、わたしたちが評価方法をしっかりと考えていくことが、どれほど子どもの学びをサポートすることになるか、現場での追究が求められている。